

世界のなかの国際日本研究を再考する

—国際日本文化研究センター創立 30 周年記念シンポジウム

「世界のなかの日本研究 批判的提言を求めて」の反省から

稲賀繁美

総括討議から

制度的状況

創立 30 周年を迎えた国際日本文化研究センター（通称「日文研」）だが、その将来は大きな岐路に直面している。任務のうえでは、一方では監督官庁や上部構造をなす法人機構からの助言のもと、国内の「国際日本」研究・教育機関を束ねるコンソーシアム組織の運営に取り組み、他方では国際的な規模で日本研究のハブ機能を完備遂行することが要請されている。さらに経営面では、国家が直面する財政破綻を背景に、期間限定の獲得型のプロジェクト予算によりこれらの新たな任務を遂行すべし、と要請されている。創設当初の 2 本軸であった国際的な「共同研究」と「研究協力」の維持継続だけでは、もはや機関の存続は許されない。加えて国内学会や学術団体の問題関心に沿い、その意向を反映した「公募型」研究活動の推進を要請されている。さらに、日本の「国立」大学法人すべてに当て嵌める事態として、片や次々と競争資金を獲得して休みなく「機能強化」を進めなければならないが、片や（こちらが原因だが）財政難ゆえに運営費交付金はこの 20 年にわたり毎年 1 ～ 1.6% 減額され続け、もはや構成員の減員なくしては予算の逼迫に対応できない状況に追い込まれている。職員の非常勤化や研究者の処遇劣化（売り手市場下にもかかわらず、任期付き教員への依存が高率化し、予算難に伴う事実上の定数削減と後任人事凍結が日常化している）による体力低下のなかで煩瑣な業務拡大・機能強化を進める曲藝が、「働き方改革」法令化の環境下で求められている。国家非常時の無理難題に対処し兼ねる法人・機関は廃絶に瀕している。

元来、日文研は、国内における日本文化研究を「国史」「国文学」「国語学」といった内側に閉じた「国学」的枠組みから解放し、海外の日本研究者との交流による相互理解の回路を確保し、新たな視野を模索できる国際的な「共同研究」「研究協力」体制を確立すること目的として創設された。1980 年代、冷戦末期のバブル好景気に乗じた時節柄、国威発揚の国策機関と誤認され、蔭口も叩かれたが、そうした悪評はようやく払拭された。その背景には、教授定数 15 名（発足時）の弱小機関にして、毎年平均それと同数の 15 名を数える海外からの客員公募を、特定の国籍に偏ることなく実現し、さらにこれと匹敵する数の来訪研究員をも世界各地から受け入れる研究体制を、30 年に渡り維持発展してきた実績がある。だが霞が関や永田町では、日文研が属する上部法人たる人間文化研究機構ともども、その存在はまったく認知されておらず、創設時に関与した為政者や官僚、創設時に錚々たる世評を得ていた著名研究者の退場とともに、日文研の神話時代、英雄時代も、今や終焉を迎えている。卓越した個人技の持ち主にはなお恵まれ

ているが、もはやそれだけでは組織維持は儘ならない。

研究主体の国籍・文化的背景

国際的な日本研究とは、なにも日本の学会で評価される業績をあげることではあるまい。むしろ日本国内の日本専門家には期待できない着眼や論点を提起し、日本研究を日本という国籍から解放することに、国際日本研究の意義もあるはずだ。国内と国外の視点の交錯による学術の相互刷新と切磋琢磨とが、日本学の国際化、さらには学術の国際的連携には不可欠のはずだ。これは尹相仁さんから提起された論点である。特定の学会で認知されることとは、その学会の流儀に染まり、そこでの慣習に同化することに等しい。それはそれで結構かも知れず、学術賞などを授与されるのは名誉ではあろう。だが、日本国内市場で認知されることが自己目的化してしまえば、それはもはや国際的という形容詞のついた日本研究とは無縁である。かといって「地元」の学会でハナから相手にされないのでは、学術成果としても認証されないことになる。この発言は重い。サントリー学芸賞受賞者であり、日本研究が長らく不在だったソウル国立大学初代の日本研究学科主任たる尹さんの発言だからである。

日本の学会の体質を大雑把に括てみると、一方では依然として本場・海外の「国際学会」での認知を希求する他者志向が根強い。自然科学の世界では『サイエンス』や『ネイチャー』など英語圏の権威ある学術誌への論文掲載ばかりが究極の目標となり、社会科学や人文学の世界でも、イギリス、フランスないしはドイツなどの留学先の、いわば「宗主国」で相手側に認められ、学者としての市民権を獲得することが、日本帰朝者の名誉となる。ノーベル賞症候群やオリンピック熱中症が、そうした相手の文化規範への依存傾向の典型をなす。

ところがこれとは対照的に、日本を対象とする学問分野となると、とたんに外来者を外様扱いする閉鎖性が露呈する。日本語はガイジンには分からない、日本文化の粋は日本人にしか理解できない式の、相も変らぬ文化的国粋主義・排外主義である。オーストラリアから来日し日本の伝統音楽研究を志した、アリソン・トキタさんの事例は、痛切な教訓に満ちていよう。理論先行の欧米学術と、文献研究や翻刻に傾注する日本の学会。日本でのお稽古事について回る煩瑣な社会慣習や困難な儀礼への習熟。そして部外者に閉じた体質。現場で通用する奏法に関する用語の英米学術用語への翻訳の不可能性。欧米側の学会からすれば「民族音楽」とは非西欧音楽を対象として「地域研究」に属するが、これは日本側の邦楽研究という視座とは背馳する。「語り物」というジャンルひとつ、日本の音楽研究者と『平家物語』などを専攻する文学研究者との間では、近年にいたるまで共通理解が乏しかった。それを乗り越えて、日本の学会や伝統保存、無形文化財行政の現場に、外からの介入ならではの影響を行使するに足る研究実績を築くには、研究者の生涯を費やし、実存を託す賭けが不可欠となる。地元の実践者や研究者は、そうとは知らず、競馬馬のプリンカーのようなものを装着し、無意識のまま視野狭窄に陥っている。そうした「目隠し」を取り除くことが、外国研究者の日本研究への寄与ではない

か。アリソン・トキタさんのこの比喩は、それ自体啓発的である。

「日本人論」の蹉跎

対欧米劣等感と日本領土内での内弁慶—これら両者の癒着から生まれたのが、例えば1980年代欧米で批判を蒙った日本人論だった。これを、日本側の増長した愛国心の発露として批判する傾向が顕著だったが、これはいささか短絡かつ筋違いだったようにも見受けられる。たしかにそこには、欧米「先進」文化圏に対する日本側の劣等感とも裏腹な、唯我独尊の居直りが顕著である。だが幼稚な日本特殊論が、北米や西欧をモデル視した「普遍」への憧れと疎外感の裏返しに他ならぬことも露見している。遡ればキリスト教神学から普遍性獲得の様々な武器を仕入れ、それでもって日本の神道を、アメノミナカヌシノカミを中心に体系化し、唯一絶対神を奉じる一神教に遜色ない教義へと改鑄した平田篤胤がその先祖だろう。

イギリス留学で本場の英文学に接した夏目漱石は、極東出身者の劣等感を払拭すべく、その晩年に「自己本位」を唱えた。ちなみに現代中国語では *appropriation* の翻訳にしばしば「本位化」が充てられる。北米の *Japanese Studies* も中国の日本研究も「本位化」は国是であって、すでに北米ではこの半世紀、中国でもここ30年、本国・日本の学術とは作法においても流儀においても、おおきな径庭を呈するに至っている。それはそれで慶賀すべき事態だが、かといって日本側の学者と非日本人学者の両者が、互いに相手の業績を等閑視したり、貶したりし始めれば、そこにはもはや学術交流は望めまい。だが、こと日本文化の精髓が対象となると、日本側専門家は、非日本人による業績を容易には評価しない。表向きの敬遠の蔭で、学問的意義を否定したりする。そこには日本を専門とする日本側研究者の、自らに閉じ籠り勝ちな性向、外国語使用の不如意、ガイジン苦手意識が、依然として払拭できない。

この30年で留学生の数は著しく増加し、人文系では院生や学部生の大半が留学生で占められる専攻も少なくない。だがこのような環境に置かれた留学生たちは、しばしば本国で受けた躰と、留学先・日本での流儀と間に、克服し難い格差や隔たりを感じ、そのどちらを選べばよいのかと、選択に悩むこととなる。出身国の学会作法や論法は、日本の国内学会では往々にして無礼にして御法度と見做されるからだ。中国の学会は外国専門家に「人民に奉仕」すべく百科事典的な鳥瞰や実用的な通詞役を求め、合衆国のアジア学会では、初心者にも理解可能な平易な米語の言葉遣いによる、広い視野に立った論文構築が要求される。だがこれは、日本の國文学や國史学その他の関連学会で、学術論文執筆や学会発表の際に要請され躰けられる作法とは、ほぼ対極にある。周知の事実では繰り返さず、学会の到達点を前提として、高見に立って立論することが、日本の学会では前提条件となるからだ。部外者には理解不能で、内通者だけに通用する術語や表現法に熟達することが重用される事態。そこにも、日本の学会が近代以降、欧米社会との競り合いのなかで「学習」した島国根性の自己保全本能の発現を見るべきやもしれまい。そしてこれらの日本語の歴史術語や、欧米語から日本語に訳された学術用語は、漢語で

は意味不明、欧米語に訳し戻しても通用しない変容を来している。

翻訳の問題

ここに学術上の翻訳問題が浮上する。日本の事例を欧米語で通用している学術用語に沿って流麗に説明する程度のことならば、学部水準で留学し、博士号を取得して大学院を修了するといった経歴を積み、さしあたりはクリアできよう。だがそうした経歴を積んだ学者には、往々にして、国内学会への復帰がままならない、という回帰不能現象が発症する。欧米学会では喝采を浴びるが、日本の学会からは、やっかみ、あるいは「お作法無視」を理由に疎外され、それが心身の外傷を生む症例も少なくない。英語が流暢にしゃべれる、あるいは対象とされる外国の語学が日本の先輩や師匠筋より巧み、となると、それだけでバッシングの対象となる。国内学会大気圏再突入失敗の事例である。

内外の学会に残る落差や両者を隔てる構造的な疎外体質が、どっちつかずの境涯に陥った個人に心身症として発現する。これはイソップ説話に見られる、鳥の王国と動物の王国との両方から疎外される蝙蝠症候群である。ここでは誰彼といった個別例を指摘することは慎むが、往年ならば、海外留学で注目された優秀な日本女性には、帰国しても日本市場には相応しい職場が見つからず、あるいは男性側からいじめを受け、結果として頭脳流出となり、海外で生涯を全うした事例にも事欠くまい。これに劣らず、帰国忌避の男性陣には、痛烈な日本批判者として名をなした著名人も少なくない。ジャパン・バッシングが歓迎される時代風潮下であれば、相手側の国に受け入れられるためには適切な適応事例。その逆に帰国後、国粋右翼と化す事例にも枚挙に暇ない。

こうした事例と、学問上の言語使用、さらに翻訳作業とは、密接に関係する。日本の事象を淀みない外国語に置換していると、受信側の相手側の受けはよいが、発信側の内面には、なにか自らを裏切っているような、おちつかない不安が過ぎる。逆に発信側の論理に忠実たらんと努めると、受信側からは理解困難とてお咎めを頂戴しがちだ。特殊をいかにして普遍と見做される土俵で通用するように改訂するか、この操作が翻訳作業と切り離せない。そしてこの改訂作業は、場合によっては出身内地に対する裏切りか、受信外地に向けた知的亡命か、といった決断と無縁でない。両者を器用に使い分ける手合いもあるが、これはこれで二枚舌、機会主義者の誹りを免れない。悪くすると多重人格にいたる精神障害が発症する。悪名高い「日本人論」も、むしろこうした病例として診断されるべき現象ではなかったか。

とりわけ、近代の日本語は、欧米語と漢語との橋渡しによって語彙を豊かにしてきた。後述する梁啓超などは日本亡命時に、その利点を生かして中国の白話改革に先鞭をつけた知識人である。インドや南米の場合には、植民地宗主国の言語支配によって、民族的な自覚までも剥奪され、あるいは抑圧される結果を招いた。国民国家としての近代日本はこの桎梏は逃れたものの、21世紀の通称「グローバル化」と呼ばれる流通システム・度量衡の地球規模での一元化の趨勢のなかで、世界有数の英語不得手国民たる自己評価・他者評価が固着し、かえって明治維新以来の「近代化」成功の思わぬ「ツケ」を払う巡

り合わせを迎えている。

ここで手短かにふたつの指摘をしておきたい。そもそも芭蕉にせよ蕪村にせよ、英訳その他の外国語訳を参照するのは、きわめて有益だ。とかく翻訳によって原語の本質的な価値が減衰する、翻訳では大切な勘所は分らないとの批判が横行する。だが芭蕉の「枯れ枝に鴉のとまりたり秋の暮れ」の鴉は何羽か、秋の暮れとは日暮れなのか晩秋なのかは、外国語に訳そうとしてみて、はじめて疑問として発現し、原文への意想外な問い直しを可能にする。マラル・アンダソヴァさんはロシア語を含めた外国語への『古事記』の翻訳を検討したが、敬語と受け身や使役が相互に互換性をもち、主語が示されない日本語の特徴に、実は神話が物語る政治支配の遂行的言表を成り立たせる語法上の策略が織り込まれていた。こうした視線は外国語を介さない限り可視化できない。『源氏物語』の場合でも、アーサー・ウェイリーによる英訳は、同時代の英国の文壇のみならず社会的規範や道徳観を照らす鏡となっており、原文との突合せは、古典学習と外国語習得にとって一挙両得となり、あわせて国際交流に必須の教養も身に着けうる。翻訳によってその素材を提供する作品が「世界文学」を形成する。

さらに、英語使用を国際化と短絡する傾向についても、一言触れておきたい。「国際日本研究」の土俵のうえでは、日本語は研究対象言語であるとともに、業務運営上の作業言語でもある。反対に英語といえば一枚岩と勘違いしがちだが、世界共通語となった言語は、実際には著しく分岐する。ノーベル文学賞受賞者の V. S. ナイポールなどは自ら英語の守護神であるかのように振る舞う折節もあったが、今や大英帝国旧植民地出身者が、大英帝国の威光を支え、その代理人を任じている。そうした脱植民地時代の趨勢に対して、日本における「海外認識」は数十年の遅れを冷凍保存しており、NHKの「英語でしゃべらナイト」など、あいもかわらず日本人を自称する人種の英語劣等感のうゑに胡坐をかき、それをさらに助長・延命しようとする画策ではないか、と思われてならない。内向き志向が顕著な日本から隣国に視線を移せば、韓国や台湾は、国内市場の狭隘さを逆手にとり、いち早く「米国型」グローバル化に同化し、大陸中国は独自の「本位化」により世界基準設定を自ら舵取りしようと機を窺っている。そのなかで倭臭ふんぶんたる漢語や和製英語の語彙をカタカナで量産し、ITや携帯電話などの器具で若い世代がそれらを増幅させている日本の大衆文化現象は、9.11以降にも日本列島に残った「ガラパゴス化」の顕著な事例として、あらためて注目に値する。ここには21世紀を迎えて初めて見えてきた、新たな翻訳問題がきざしているはずだ。

Kritik と批判との落差

今回の会合では、海外からの参加者から、日本の、あるいは日文研の日本研究にたいする批判的提言を求めた。ここで「批判」という言葉を問題にしたのが、ドイツの文献学の伝統を具現する、マルクス・リュッターマンさんだった。Kritik という言葉は、欧州の学会では、少なく見積ってもデカルト以降の伝統を負っている。日本ではとかくデカルトは身体と精神を分離した哲学者として、批判も多い。だが実際にデカルトが主張

したのは、身体の原理すなわち物理法則だけでは解決のつかない領分として精神を確保し、そこに探りを入れるために彼が開発したのが、自己省察あるいは critique という方法だった。ところがそれに当てられた訳語の「批評」は、儒教世界では政治的な分別すなわち上下関係を前提とする。君主に対する臣下のあるべき態度という名分論を前提とした「批判」は、西欧世界のデカルト以来の伝統が語る Kritik とは似て非なるものではないか。そもそもそうした洞察に欠ける批判的行為が、日本の学術の「自己本位」を妨げる隠された要因のひとつではないのだろうか。

漱石の英文学の先生だったジェイムズ・マードックは、離日するや、オーストラリアに移住し、かの地で日本研究の礎を築いた。バーバラ・ハートリーさんの指摘である。ところで平川祐弘氏の研究によれば、漱石の「マードック先生」に触発されたのが、ほかならぬ魯迅の「藤野先生」。この説は中国革命の旗手たる模範的作家を、日本のブルジョワ小説家の亜流と見做し、剽窃者扱いするとは何事か、として、発表当初、竹内好らから猛反発、それこそ「批判」を食らったという。だが、平川説は、現在では大陸中国でも広く支持され教科書に言及される定説へと変貌を遂げた。国境や国籍・文化圏を超えた師弟関係は、しばしば思わぬ自己批判意識の発芽を促し、自己意識の牢獄からの解放を約束する。研究者共同体というものも、特定の学閥や学統への帰属意識を超えて、相互交流の出会いの網の目のうえに想定したほうが健全ではあるまいか。ここに日文研の果たすべき国際的役割の一端も見えてくる。

世界文学のなかの日本文学

ここで「世界」という尺度のなかで、日本をいかに位置づけるかが問われることとなる。先刻も手短に触れた「世界文学」という概念を、今少し検討しよう。通念としては J.W. ゲーテの Weltliteratur の提唱に淵源を発するとされるが、ヴォルフガング・シャモニーさんの研究によれば、それに先立つ用例もドイツ語圏では知られている。共産主義圏では、「世界文学」は学術上の範疇としても、1950 年代から市民権を得ており、大規模なロシア語への「世界文学全集」翻訳プロジェクトも推進されてきた。これに対して、冷戦体制崩壊後、近年では欧米圏の比較文学研究者を中心に、西欧の文学規範が脱近代主義、脱植民地主義の隆盛とともに崩壊した以降の現状認識に基づき、欧米規範の塗り替えが提唱された。かつての「非同盟」諸国の第三世界、さらには従来では視野に入ることも稀だった、アジアやアフリカ各国の文学がノーベル賞候補に指名されるようになった経緯も無視できまい。この 30 年ほどで現代の「世界文学」を再定義しようとする趨勢は、もはや押しとどめ得ない。とはいえここでも、主要な欧米語への翻訳が、未だに国際的文学賞受賞の前提条件となり、そのためには、欧米の文学市場の嗜好や趣味、さらには政治的正しさに合致した判断基準に沿うことが暗黙裡に要請される、という政治的な問題も無視できまい。先に触れた翻訳問題がここに関わるが、それと並んで、欧米社会の内部でも、複数の文化圏を跨ぐ話題が好んで取り上げられ、創作の過程でも多言語間の往還のなかで生成する文学現象を、「世界文学」と再定義する見方も浮上してきた。

単一言語を前提とした国民国家理念の破綻や、多国籍企業の活動が当然となった現今の世界の金融や物流、亡命者を含む移民状況への注目も、その背景をなす。

王中忱さんは堀田善衛の『歯車』を「世界文学」として扱われるべき作品とみなした。矛盾の『腐食』に堀田は触発されていることが、その根拠となる。以下は稲賀の補足だが、同じ矛盾の『子夜』とアンドレ・マルローの『人間の条件』さらには横光利一『上海』を、戦中期の上海を舞台とした実録仕立ての小説群として並べて読むことを、かつて仏文学者の故・渡辺一民が提唱していた。その延長上で、マルローの小説の主人公格のモデルであった小松清が日本敗戦直後のヴェトナムを舞台として、和平交渉の水面下を描いた『ヴェトナムの血』、さらには、近年の作例として、一方でカズオ・イシグロの『わたしたちが孤児だったころ』から松浦寿輝の『名誉と恍惚』にいたる系譜を、国際都市上海の租界をめぐるトポスとして「世界文学」の俎上にあげ、総合的に考察してみる可能性も考慮に値するだろう。

王先生は「世界文学」を、中国の大学での科目名という枠で構想しているが、それはあるいは歌舞伎でいう「世界」でも構わず、様々な「世界」の定義が可能となる。『上海日記』も公表された堀田が、狭い日本文学の土俵を離れ、「世界文学」の住人に遇されるのも、まことに相応しい。虚構と実録との垣根を越えて、松本重治の『上海時代』まで視野に含めるならば、『魔都上海』（劉建輝）の歴史的文化史の地誌・地形図のうえに、ひとつの多国籍都市文学も展望できよう。日本文学はもとより現在の日本領土に限定されるものではない。戦前の帝国の版図や植民地経営の現場には、様々な利害や視点が錯綜する。また日本語も日本人国籍保有者の専売特許ではない。外地日本文学、日本占領下の非日本語文学さらには非日本国籍者による日本語文学へ、と視野を拡大するならば、それと世界文学という枠組みとがどのように交錯するかに関しても、さらに突き詰めた理論的考察が要請されるだろう。

脱植民地現象とは、日本もまた無縁ではない。日本支配下の台湾や朝鮮半島の文学研究を言語別ではなく横に連らね、さらにブラジルや満洲国を舞台とした移民文学研究にも視野を広げることが、国際日本学に重要な試金石を提供する。いうまでもなく、ここでは支配・被支配の関係につき、図式的でない接近が不可欠だ。「慰安婦」徴用問題ひとつとっても、政治決着とは別途の次元へと回路を開くことが不可欠だろう。被支配を経験した社会の側の内的な必然性が、どのような歴史的経緯を経て現在の政治意識や民衆運動を醸成しているのか。その理解が、相互的国際日本学の構築には不可欠だろう。文学であれ藝術であれ、表象や表現は創作者個人の意思や為政者の解釈によって一義的に統御できるものではない。意味を育て、それを培ってゆくのは、関わる人々の意思である。異文化間の相互理解を律するためには当然なこの前提が、現在の国民国家の教育制度では蔑ろにされている。短絡な愛国教育は、国内での不都合な現実から国民の目を躲すための、眼くらましの囫に他ならない。

アジア革命家の集積地としての日本

思い返せば、近代と呼ばれる時代にあって、長崎や横浜そして神戸は、広東や上海に劣らず、亡命知識人の潜伏地となり、革命運動の発祥地とすら目された。韓東育さんは朱舜水の事例を取り上げたが、鄭成功の使節として長崎に滞在したこの儒学者が、徳川光圀に厚遇され水戸学の発展に寄与したことは、17世紀の東アジア文化史において看過しがたい事績である。スペインのフェリペ2世の没年が豊臣秀吉のそれと同じ1597年であり、徳川家康が三浦按針らを使って欧州との交易に前向きに取り組み、さらには明の遺民、近松門左衛門「国性爺合戦」の混血遺民・鄭成功が、西班牙の跡を襲っていた和蘭勢を追い落として台湾支配を開始した。そうした史実からは、海洋国家としての当時の日本の潜在的可能性も推測できる。

そのうえで所謂鎖国を選んだ日本の位置は、あらためて世界史のなかで再考されるに値する。バブル経済末期の日本では、徳川日本が称賛されたが、それはポスト・モダンの理想を安易に江戸時代に重ね合わせる時代錯誤に他ならぬと、批判もされた。とはいえ、敗戦後以来のマルクス主義史観は、徳川に近代以前の封建社会という暗黒像を貼り付けることに腐心したし、それに続く1960年代の北米を主軸とする近代化論は、今度は西欧近代をモデルとしてそれへの展開に先鞭をつけた幕末明治期の啓蒙を評価してきた。いずれも西欧社会を典型として非西欧社会を分析するという性向から脱し得ず、日本の主流学会もそうした拝外志向に追随するばかりだった。Pax Tokugawana を提唱した芳賀徹氏は学士院恩賜賞の対象となった近著『文明としての徳川日本 1603-1853年』（2018）で、そうした他者依存の視座から脱却して、各文明が他との相互交渉を通じて培った内在的特質を明らかにすることが、むしろ将来の世界のための範例を模索するためにも有効ではないか、と提案する。

ファン・ハイリンさんは江戸時代を通じて6回にわたって象が招来された事例を取り上げた。タイやヴェトナムの現地でのゾウの価格は、日本に齎されると額面では750倍にも上昇する。象の輸入へのヴェトナム商人の関与については、近藤重蔵の『安南紀略』にも象の招来に関わる価格や運搬船舶について詳細な記載があり、貴重品の交易がもたらす付加価値の大きさも歴然とするが、東南アジア現地では、象はまた木材運搬に従事する家畜であるとともに、北方の馬同様に、軍事用途の乗り物でもあった。さらにこれらの交易を司る銀は、清朝において決済の手段であり、清を中心とした銀の大規模な移動とアヘン戦争にまで至る金融の実態復元もまた、東アジア経済史では、近年とりわけ大きな注目を集めている研究課題である。ファン・ハイリンさんはさらに松坂を産地とする木綿織物、松坂縞についても研究をすすめる、伊勢の回船問屋、角屋七郎兵衛栄吉が1632年から41年間ホイアンに永住した事績をもとに、17世紀におけるヴェトナムから日本への綿織物の交易の実態復元に挑んでいる。これら交易に関する事実を丹念に再構築することから、いわゆる鎖国時代の東アジアや東南アジアを含む地域の海上交通の実態と、日本との関係も洗い直しがなされよう。評者は共同研究として『海賊史観からみた世界史の再構築』を取り上げ、海上交易の見地から現代にいたる世界史の見直しを提

唱しているが、ここでもヴェトナムの関与は看過しがたい。

東・東南アジアの近代化において、日本の福澤諭吉に類する役割を担った人物に、梁啓超を数えることが出来よう。実際、東海散士の『佳人の奇遇』を梁啓超は、横浜で創刊した『清議報』（1898年創刊）誌上で『佳人奇遇』として漢訳連載したが、それは追ってファン・チュー・チンにより、ヴェトナム語韻文に翻訳され *Giai Nhân Kỳ Ngộ Diễn Ca* つまり『佳人奇遇演歌』として流通する。クオック・ゲー（国語）で記された訳文は1926年に公刊され、ヴェトナム近代を代表する国民文学の一編として遇される。先述の韓東育さんによれば、水戸藩に厚遇された李舜水の事績を取り上げ、その梁啓超はこう述べていた。「舜水之学不行於中国、是中国的不幸。然而行於日本、也算人類幸了」と。晩年の『中国近三百年學術史』（1926）にみえる述懐だが、人類史という広大な視野にあって、東アジア史を鳥瞰する梁のごとき見識は、およそ現今の日本の歴史学者や国際関係論研究者には期待できまい。梁啓超自身も、朱舜水同様、日本に亡命して啓蒙活動を通じ中国近代化に尽力した人物である。亡命知識人の視点を借りた日本認識もまた、国際日本学という分野にとって不可欠の論点を提供する。

国際関係論再考 所有による正義から品位による評価へ

大正時代に視点を移しても、同様の視座はなお日本近代史研究において大きく欠落しているのではなかろうか。これは『第一次大戦と新たな日本の勝利』の著者、フレデリック・ディッキンソンさんの問題意識とも重なる。ランジャナ・ムコパディヤヤーさんはヴィスヴェスヴァラヤ M. Visvesvaraya（1861-1962）とサイード・ロース・マスード Syed Ross Masood とを、インドにおける日本研究者の先駆として取り上げた。ふたりはともに1922年に初来日を果たしているが、これはおよそ偶然ではない。第一次世界大戦が終結し、ヴェルサイユ体制が確立するが、その直後の1919年、朝鮮半島では三・一独立運動、中国の五・四運動、インド亜大陸ではアムリツァーの虐殺事件という植民地体制の病理の典型というべき事件があいついで勃発している。帝国主義植民地統治の実相が露わとなり、第三世界出身者たちが国際的な連帯を模索し始めたのが、この時期だった。アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞した詩人のロビンドロナト・タゴールは1916年に続き1924年にも来日している。また朝鮮陶磁とインドとの橋渡しを果たしたグルチャラン・シンの来日も1919年のこと。彼がイギリスの陶藝学校に留学せず、なぜ日本を選び、柳宗悦や浅川巧らと親交を結び得たのかは、こうした国際情勢を視野に収めなければ理解できまい。さらに言えば、コスモポリタン意識や民本主義が喧伝されるこの時期を理解するには、国際的な諜報スパイ網の研究も疎かにできない。1930年代のブリテッシュ・カウンシルや、日本ならば国際文化振興会などの活動がここに密接に関連する。また仏教諸派の海外布教や三井物産、大阪商船などの貿易活動も、無縁ではない。海洋交易史や移民史が、この時期を対象とする国際日本学の探究課題として浮上する。

翻ってみるに、こうした知識人たちの活動を、国境を越えて理解し、残された文献資

料を基軸に広義の「世界文学」の構成要素として鳥瞰するような視点は、敗戦後の戦争忌避に縛られてきた日本の学術には、とりわけ乏しい。日露戦争期の海軍に関しては、島田謹二の著作が先鞭をつけたものといえよう。その前後を含む時期を国際的に鳥瞰すべく、筆者は共同研究会の成果報告として『東洋意識』(2012)を編纂した。だがそれをあっけなく凌駕する企てをパンカジ・ミシュラ『アジア再興—帝国主義に挑んだ志士たち』(園部哲訳、白水社、原題は *From the Ruins of Empire: The Intellectuals Who Remade Asia*、2013) が実現している。本書は、アル・アフガーニー、梁啓超にラビンドロナータ・タゴールを主要な主人公として、かれらの人間模様と思想の交錯とを、破綻なく見事に世界史大に展開してみせた、優れた読み物と評価したい。福沢諭吉や徳富蘇峰を同時代世界史のなかで評価するには、東洋全域への目配りは不可欠ではなかろうか。国際日本研究とは、世界の沃野へと国内の研究を拓く場でもありたい。

こうした研究計画として、日文研を初動機関としながら、その後国際的な展開を実現した模範例としては、台湾の中央研究院に所属する黄自進さんが進めた事例に指を屈したい。日文研における黄氏主催の共同研究「日本の軍事戦略と東アジア社会—日中戦争期を中心として」(2014-15)はその後、中央研究院・近代史研究所における「和解への道—日中戦争の再検討」(2015-17)に引き継がれ、国際シンポジウムの開催へと発展した。さらに早稲田大学で2017年度から「和解学の創成:正義ある和解を求めて」が「新学術領域研究(研究領域提案型)」として新規採用されている。その詳細は黄論文に譲るが、特定の機関だけでは実現不可能な研究プロジェクトが多段式ロケット顔負けの発展を遂げるうえで、日文研が発信基地としての役割を果たし得た貴重な事例であり、今後のモデルとなることも期待される。

グローバル・モルモット「日本」を国際的に研究する意味と可能性—小結にかえて

すべての議論に過不足ない講評を加えるのは、もとよりここでの意図ではない。最後に、コメントとして磯田道史さんから示された「グローバル・モルモット」Global guinea pig としての日本という論点に触れておきたい。世界基準なる標準化に抗して、それとはコンパチではない、つまり共約性に欠けた列島文化に内没する傾向は、思えば pax Tokugawana の260年にもみられた孤立化政策だった。日本列島は孤立という理念を通して、世界と繋がり、活発な交流とりわけ物流を維持していたからだ。そしてこの「孤立」を改めてここ500年のスパンで世界史的に再検討する機運も醸成されてきた。日本列島は決して経済の世界システムから除外されていたわけではなかったからだ。21世紀を迎え、もっぱら内向き志向を指摘され、世界のなかでの孤立した実験場として日本文化を「批判的」に考究する——。それは、バブル経済崩壊後に一時期取り沙汰された「ガラパゴス」現象、長期経済的低迷下の日本原産の大衆文化の趨勢を捉える視点とも重なってくる。日本国籍者は内向きかもしれないが、列島には多くの外国人が流入しており、人口動態学や都市生態学も、もはや日本国籍者の人口構成だけで列島の社会を理解できる段階など越えている。そしてそれは世界各地の多くの都市圏に共通する。

中国近代史における蔣毛交代、すなわち蔣介石の国民党から毛沢東の共産党へという権力奪取が、長期的な視野からみてひとつの消耗戦でしかなかったとなれば、その傍らの周辺国の後期資本主義時代から脱近代への舵取りは、従来の通説的理解を塗り替える可能性を孕んでいる。禍福は糾える縄のごとし、と言われるが、世界は複雑な利害によって相互依存のネットワークで結ばれており、もはや国民国家単位での優劣の競い合いでは、東アジアや地球世界の現状を理解することは覚束ない。「国際」を冠した「日本研究」とは、こうした現状認識のもとで刷新されるべき頃合いを迎えている。韓東育先生は、国際政治への関与にあって、学術研究は対立の火に油を注ぐのではなく、むしろ消防車の役割を任じるべき、と指摘された。その顰に倣って蛇足を加えたい。およそ物事を壊すのはいたって容易い。兵器と呼ばれる死の産業はもっぱらそうした破壊行為に加担する。だがなにかを作り上げてゆくには、おそろしい忍耐と労苦が要求される。モノをツクルのは大変であり、教育や研究はそのモノツクリのワザの末端を支え、それを世代から世代へと手渡す。これを軽視する政府が没落し、国民が疲弊するのは当然であろう。官僚機構に対しては「拝官不就」を貫きたい。

とかく外国を調査地とする地域研究者は、出身の自国に深い関心を抱かない。日本の場合も、邦人の外国専門家は概して海外の日本研究者との交流が疎かであり、反対に日本の国学には、外国からの参入者に対しても、頭から日本の国内流儀を押し付ける傾向が否めない。この両者に擦れ違いと意思疎通不全が残る限り、日文研にはその間隙を埋め、流通を促進する役割が残るであろう。兩岸に電位差があり、両者の接触が化学反応を惹起する限りにおいて、徳川時代の象の交易同様に、双方がそこから利潤を得ることができる。平準化が完了しない限り、国際日本研究というプラットフォームは、存在価値を失うまい。そしてその兩岸とは日本と特定の他国との一対一の関係ではない。点と線ではない多面的な発着場、多方向的、双方向的な交流を確保する「接触領域」さらには、多文化への射程を組み込んで、将来への展開の基軸となる発信基地として、30周年を迎えた日文研を、あらたに再定義してみたい。

今回の記念シンポジウムは、小規模ながら、枢要な研究者の参加を得て、学界に内没した延命策に終始するような議論を乗り越え、過去を振り返り、将来への「文化的実験動物」の社会生態研究にむけ、有効な視野を拓くために格好の議論を提供したものと評価したい。

2018年5月18-19日執筆

*シンポジウム出席者には「さん」、生存者には「氏」、執筆段階での物故者からは敬称を略した。